

ガラスのロウソク

古代より現代にいたるまで教会、寺院、社殿といった「いのりの空間」は、来訪者により掛けられたロウソクの輝く、しかし力強い光によって彫られてきた。それらは、時間という喪行き、固の有限性と金体の永久性から、生命的な啓示をも人々に与えてきた。

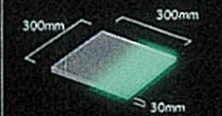
この「いのりの空間」ではロウソクの代わりに蓄光性のガラス板（光板）を訪れた人々が太陽のもとから地下へと運び込む。そして闇の中に光をそれぞれが投じることで空間をかたちづくってゆく。

来訪者は地上の光を抱え込みながら地下へと降りていき、やがて「いのりの空間」にたどりつく。彼（彼女）が光板を壁面へとさしこむと、光は降り合った光板どうしをつないでながら拡散し、やがて空間の一部として溶け込んでいく。

彼（彼女）がそこで祈り、あるいはたずみ思いにふける間にも、持ち込んだ光板は力を弱めていくが、新たな来訪者により、さらなる光が空間に注がれていく。時の流れに寄り添いながら、若い光、古いゆく光、そして沈黙の闇が空間を奏でてゆく。

空間を構成する「光板」

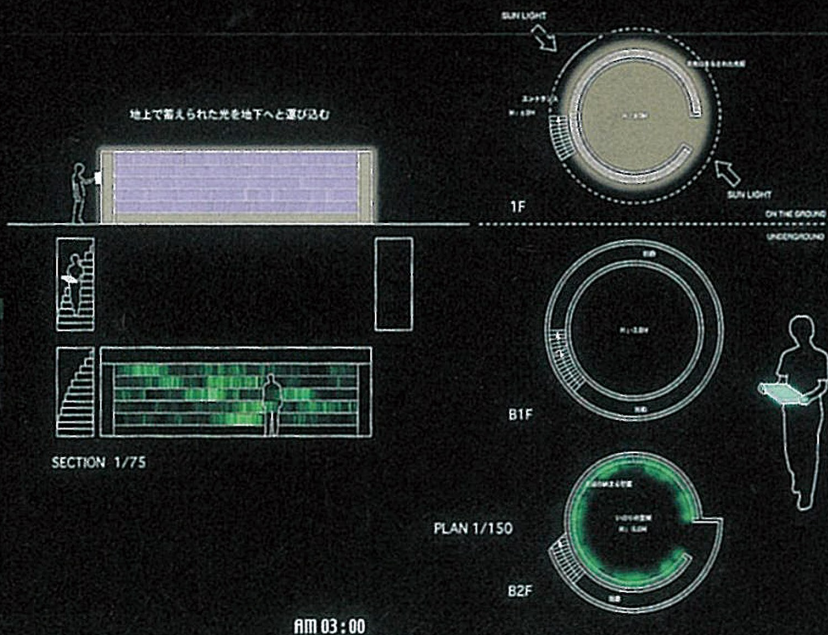
300mm×300mm×30mmのガラス板が本館のように空間の壁面に納まる。材質は近年開発された緑色蓄光ガラスであり、日光を照射した後、暗闇で長時間発光する。軽量化のため内部は中空になっている。



光板のたどる過程



地上で蓄えられた光を地下へと運び込む



PM 09:00

PM 11:00

AM 01:00

AM 03:00